

安全衛生 あれこれ

増田労働衛生コンサルタント事務所

所長 増田稔久

29

労働災害の史跡を訪ねて

〜船員災害の慰霊碑が白鳥に〜

かつて当協会が主催した「労働災害史跡等から今後の安全衛生を考える見学会」（平成30年11月）では、私もガイドとして「織姫の碑」「猿投ダンブ事故碑」等を説明しました。その後

も「愛知用水」「徳山ダム」「大井ダム」工事等の労災慰霊

碑を調べており、また次の機会にご案内したいと思っています。その中で今回はユニークな慰霊碑を紹介いたします。

名古屋市熱田区にある成福寺（じょうふくじ）に、写真（別掲1）の千石船の形をした慰霊

（別掲1）



成福寺（上）と境内の慰霊碑（名古屋熱田区白鳥2-7-16）

（別掲2）

江戸時代の主な漂流事故	
発生年	船頭等（基地）
1668	次郎兵衛（愛知）
1670	長右衛門（和歌山）
1696	伝兵衛（大阪）
1764	孫太郎（福岡）
1782	光太夫（三重）
1785	長平（高知）
1793	津太夫（宮城）
1806	善松（広島）
1810	久蔵（広島）
1813	重吉（愛知）
1832	音吉（愛知）
1841	万次郎（高知）
1851	彦蔵（兵庫）
1852	勇之助（新潟）

碑があります。これを知ったのは、NHK「漂流アドベンチャー」でした。漂流と言えば「ロビンソンクルーソー」等の物語での世界でしたが、この様な身近な場所に200年前の実際に起きた船員労災の石碑があったとは驚きでした。

江戸時代、知多半島は江戸等への廻船（千石船）を用いた海運業が盛んな地域でした。しかし昔のこと、ひとたび嵐となれば沈没等の海難事故が発生しました。また沈没を免れても、海が荒れると舵を失い、揺れる船の安定のため帆柱を切り倒すこともありました。嵐が収まった後の船は海流任せの漂流で、陸地や助けてくれる他の船を待ち続けました。彼らは海水を蒸留した真水を飲み、積み荷の食料や釣った魚を食べ、知恵と工夫

で飢えをしのぎましたが、数カ月もすると壊血病や栄養失調で亡くなる者も出て来ました。

別掲2「江戸時代の主な漂流事故（14件）」は漂流後に救助された事故の一覧で、愛知県は3件、その一つが1813年重吉（愛知）の事故です。

その年、小嶋屋（名古屋）所有の督乗丸（1200石積の千石船14人乗・船頭重吉）は、師崎から味噌・醤油を積んで江戸へ出航しましたが、その帰りの11月4日、御前崎沖で嵐に見舞われ舵と帆柱を失くし漂流が始まりました。督乗丸は太平洋を南下して赤道を過ぎた後、北上したと推測され、1815年2月14日、カリフォルニア沖でイギリス船に救出されました。漂流は史上最長の484日にわたり、過酷な漂流生活を生き

残ったのは船頭の重吉を含めわずか3人でした。助けられた重吉らは、ロシア船で帰国、江戸で事情聴取を受けた後、1817年5月帰郷を許されました。

これらの事情は「船長（ふなおさ）日記」に記録され、督乗丸の帰りの積み荷は大豆で、きな粉にして飢えをしのいだとあります。同乗の乗組員が栄養失調で次々と命を落とす中、彼らは生き残った者が慰霊碑を建立し、亡くなった者を供養すると約束をしていました。

重吉は帰国後、外国から持ち帰った珍しい品々を各地で展覧し体験を語ったりして資金を集め、1824年頃、慰霊碑を笠寺に建立し約束を果たしました。その後、慰霊碑は1853年現在地に移設されました。

訪問した成福寺では、苦難な旅を生き残りトップの責任を果たした船頭重吉と故郷に帰ることの出来なかつた被災者に想いを巡らせ、慰霊碑に手を合わせました。お出掛けの場合、成福寺は入口の木戸が常に閉められています。ご住職からは自由に開けてお入りくださいと伺いましたが、ドアフォンがあるので一言断られるとよいでしょう。